

サイトマスター便り

【技術経営】モテ期絶頂だったあいつが暗い男に

驚くような「変化の予兆」の見つけ方

山崎 良兵

2016/04/05 00:00

驚くような大きな変化を起こす「きっかけ」や「予兆」をいかにして発見するのか――。2016年2月29日から3月31日までに、日経テクノロジーオンラインのテーマサイト「技術経営」で読まれた記事のランキングの上位には、「未来予測」に関連する記事が目立ちました。

まず1位が「同窓会で腰を抜かして考える、不連続な変化の力」で、執筆者は米Strategic Business Insights社 Vice President/Intelligence Evangelistの高内章氏です。

「モテ期絶頂でハツラツとしていたあいつが、眉間に皺をためて暗い目の男になっていたり、ゼミでは端っこで小さくなっていた劣等生が大学教授になって威厳のあるオーラを発していたり。ちょっとしたキッカケで人は大きく成長し、ふとした出会いがその人の生き方を大きく変える」。

高内氏は記事中で、同窓会でかつての同級生たちに再会すると、こんな風に驚くことがしばしばあると指摘します。このような不連続に思える変化が起きたのは、何がしかのきっかけがあるはずで、同様の変化は、人間に限らず、さまざまなモノやコトにも起こりえます。

奇妙にして愚劣なる商品と叩かれた電子レンジ

例えば、電子レンジ。食品の流通や包装を変えた画期的な技術ですが、1970年代初頭に日本で発売された当時は、否定的に受け止められる場面が少なくありませんでした。詳しくは記事をご覧くださいのですが、主婦向けの雑誌で『電子レンジーこの奇妙にして愚劣なる商品』といった非常に批判的な特集が組まれたりしたそうです。

1970年代に電子レンジが持つ潜在的なインパクトの大きさに気づいていた食品メーカーの商品開発者はきつと少なかったことでしょう。しかし電子レンジはコンビニエンスストアの弁当や家庭で作り

アクセス記事ランキング (2/29~3/31)

技術経営	
1	同窓会で腰を抜かして考える、不連続な変化の力
2	原価割れより深刻なマクドナルドの「客離れ」問題
3	「専門家の予測」を信じることの危うさ
4	「1000の未来予測」から見えてくること
5	危ない顧客志向
6	技術軽視、技術偏重の落とし穴
7	IECが「すごい」と言った資格
8	ビジネスこそが技術を進化させる
9	日本企業は特許以外の方法で市場支配に注力し始めたービジネスで競合他社に勝つ方法ー
10	医療・健康、保守本流の技術は市場を失う
11	使えるロードマップと使えないロードマップ
12	人・技術・規制、医療健康のすべてが変わる
13	メルトダウンを防げなかった本当の理由
14	Appleにも鴻海にもなれなかった日本メーカー
15	義務化されたストレスチェック、強化される化学物質管理
16	むしろ、「初めに値付けありき」でいいんじゃないかと
17	フォックスコン深セン工場を一周してみた
18	技術と知財で勝る日本が世界でなぜ勝て

置きした料理などを手軽に温めて食べるといった新しい食文化を創造しました。

「当初気にもかけていなかった小さな変化の中には、時としてうねりを伴って事業環境の変化を引き起こすものがあり、それは企業に大きな事業機会をもたらす。一方で、気づくのが遅れた企業には容赦なく敗者の烙印が押されていく」。記事中で高内氏はこう述べています。

それではこうした大きな「変化の予兆」を企業が発見するためにはどうすればいいのでしょうか。同記事では「ブレインストーミング（以下、ブレスト）」の手法などを紹介しつつ、未来が多様な可能性を持つことを認識し、変化に関心を持って備えることの重要性を説いています。

専門家の予測を鵜呑みにしてはいけない

ランキング3位は「『専門家の予測』を信じることの危うさ」。執筆者は株式会社盛之助の代表取締役社長、川口盛之助氏です。同記事では各分野の専門家による未来予測が当たらないケースが目立つ理由をこう分析しています。

「各分野の技術は単独で勝手に進化するわけではなく、他分野で発生した技術の影響を強く受け、ときに融合しながら新技術を生み出していく」

例えば、ICT（情報通信技術）の進化は、同業界に限らず、多様な分野に影響を与えています。自動車業界では、各社が自動運転車の開発にしのぎを削っており、人工知能（AI）の活用にも積極的です。建設機械業界でも、コマツがICT建機の開発を加速させています。

つまり分野の外にあると思っていた技術の進化が、業界を根底から変えるような大きなうねりを生み出す可能性があるのです。



米Google社の自動運転車。既存の大手メーカーも自動運転車の開発を急いでいる。

各領域をバラバラに分析するだけではなく、広い視野が必須

「領域を超えた体系の再構築が進む過程においては、各領域をバラバラに分析していても、そこから出てくる予測は無意味とは言わないまでも、極めて精度の低いものにならざるを得ない。長期的な予測をしようとするなら、広い視野が必須ということだ」。川口氏はこう指摘します。

ランキング4位も同じ川口氏の「『1000の未来予測』から見えてくること」でした。同氏は2025年までに起きる劇的な変化と未来像をまとめたレポート『メガトレンド2016-2025 [全産業編]』（日経BP社）の執筆者でもあります。

この記事のURL：<http://techon.nikkeibp.co.jp/atcl/column/15/264994/040100050/>

Copyright © 1995-2016 Nikkei Business Publications, Inc. All rights reserved.

このページに掲載されている記事・写真・図表などの無断転載を禁じます。著作権は日経BP社、またはその情報提供者に帰属します。